

第4回教育哲学会奨励賞 選考結果および授賞理由

選考結果

第4回の教育哲学会奨励賞は、『教育哲学研究』第114号、115号に掲載された論文を対象として理事会において選考を行い、奨励賞にふさわしい論文として、山田真由美会員の「京都学派の教育思想における主体—木村素衛と高坂正顕を中心に」と、西本健吾会員の「1930年代デューイ思想における美と政治の緊張関係—全体主義との対決に着目して」（いずれも『教育哲学研究』第115号所収）を受賞作として選定した。

授賞理由

山田論文は、京都学派における「主体」形成という課題の展開を、木村素衛と高坂正顕に即して再構成している。無の場所たる世界の自己限定として個が成立する、という西田の発想を受け継ぎつつ、両者は「主体」形成を可能にする具体的な場所を「国体」や「民族」に求めていった。山田によれば、こうしたモダンな「主体」への回帰を避けるためにも、「主体」についての哲学的・原理的考察と歴史的現実との、理論的架橋が不可欠なのである。

西本論文は、1930年代のデューイに見られる全体主義との対決の論理を、美的経験論を軸に捉え直そうとしている。デューイは美的経験の特質を主客未分の直接性に見ていたが、制作や鑑賞という具体的な場面に着目すれば間接性の契機が導入されてもいる。そうした間接性によって、芸術は予期せぬ意味を創出する可能性を開くのであり、西本はここに、デューイの美的経験論から全体主義に抗する創造的コミュニケーションへの道筋を見ている。

以上のように、山田論文と西本論文はともに、古典的なテキストを同時代の歴史的文脈と関連づけて緻密に読み解くことで、現代の教育課題への新鮮な視点を提示することに成功している。山田論文は、「主体」の形成を、歴史におけるその否定的な帰結をも踏まえた上で、現代の教育課題として提起しようとしている。西本論文は、感覚や欲望をテコにしてなされる現代的動員に対抗する可能性を、美的経験が示す間接性のなかに見出そうとしている。両論文に対しては、先行研究に配慮しすぎてその主張に大胆さが欠けているのではないか、という厳しい意見もあったが、これは逆に、両論文がそれぞれのテーマに関わる研究の到達点を的確に把握しつつ、それと批判的に対峙しようとしたことを示すものでもある。両論文は、教育哲学研究への寄与というその成果のみならず、古典的テキストや先行研究との真摯かつ批判的な取り組みという点でも、甲乙つけがたい優れた研究として評価できる。

以上から、理事会では上記2篇の論文を第4回教育哲学会奨励賞にふさわしい論文として選定した。なお、奨励賞規定では論文1篇を授賞対象とすることとしているが、今回は両論文がともに奨励に値する優れた論文と判断されたことから、例外的に2篇の論文に奨励賞を授与することとした。